4/12/2013

＊キリスト教学演習＊＊＊＊ S. Ashina

＜オリエンテーション＞

Ａ．テーマ：キリスト教思想の基本文献を読む

キリスト教思想を理解し、研究するには、その基本的な文献を広くまた深く読むことが必要である。この演習では、近代以降のドイツ語による文献を精読することによって、キリスト教思想研究に必要な文献読解力の向上をめざす。

今年度は、ティリッヒ（1886-1965）の宗教哲学に関わる文献から、次のものを取り上げ、演習を行う。

Ｂ．テキスト

Paul Tillich, *Religionsphilosophie*, 1925.（*Paul Tillich. MainWorks 4*）

Ｃ．成績などについて

・平常点による。（受講者には、数回の発表担当を課するが、その発表内容と、毎回の演習への参加度とから総合的に判断する。）
・使用するテキストについては、コピーを配布する。
・参考文献：授業中に紹介する
・受講生には、キリスト教思想に対する関心と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（木２・金３）を利用するか、メール（アドレスは、授業にて指示）で行うことができる。

Ｄ．授業（予習＋出席・発表＋復習）の進め方

１．演習参加者の役割

(1)授業前：読み・訳す・分析する　→　問題点・補足事項
(2)授業での発表：順番に読み・訳す。質疑。討論。
(3)授業後：残った問題を検討する

. 前期半期：4/12, 19, 26, 5/10, 17, 24, 31, 6/7, 14, 21, 28, 7/5, 12, (19), 26

＜導入講義＞

ティリッヒ　二一世紀へのメッセージ

序　ティリッヒを読む

ティリッヒとはいったい誰であったのか､ティリッヒの思想はいかに理解すべきなのか。これらは容易に答えうる問いではない。これが、曲がりなりにもティリッヒの思想と長年取り組んできたわたくしの正直な実感である。というのも、ティリッヒの思想がカバーする問題領域はきわめて広範に及び（神学、哲学、倫理、政治、経済、科学、教育、芸術、精神分析、時事批評などなど)、しかもそれぞれについて透徹した思索が行われている。したがって、それは安易な要約を許さないからである。これは、二十世紀を代表するもう一人のキリスト教思想の巨人バルトの場合と同様である。そこで本稿ではティリッヒ自身

の方法によってティリッヒを見るという戦略を採ることにしたい。

ティリッヒは『現在の宗教的状況』(1926)の中で次のように述べている。「現在を認識するということは、より身近な過去とより遠くにある過去とに対する現在の肯定と否定を把握することである」、「現在を理解するということは、未来に向かう現在の内的緊張を見ることである」、「現在のなかで過去の現実化から未来の現実化へと突き進む永遠的なものを問い求めることができる」。こうした「現在」を見る態度はティリッヒ思想の理解という本稿の課題にも妥当する。そこで、以下の叙述は、ティリッヒがその思想を形成した思想史の文脈、ティリッヒが生きた時代状況とその課題、ティリッヒの思想における未来への可能性、そしてティリッヒを突き動かした永遠的なもの、という四つの観点からなされることになる。ティリッヒは二一世紀に踏み出そうとする現代人に対していかなるメッセージを語りかけているのであろうか。

一　過去 ── 思想史的背景から見たティリッヒ ──

過去の遺産をコピーするだけの思想が「現代の問い」に答えることができないのに対して、過去を無視する思想家は「現代の問い」を理解することすらできない。その点二十世紀のキリスト教思想家の中でもティリッヒほど近代プロテスタント神学の思想的遺産と正面から対決した思想家はいないであろう。ティリッヒの宗教思想が形成される直接的な思想史的コンテキストは一九世紀のキリスト教、つまりキリスト教の諸伝統 ── 正統主義、敬虔主義、合理主義（啓蒙主義） ── の総合の企てとその挫折の歴史に他ならない。ティリッヒは、ヘーゲルとシュライエルマッハーの中に近代世界においてキリスト教が直面したキリスト教的伝統と世俗的合理主義の総合という思想的課題を読みとり、自分がおかれた状況において同様の思想的冒険を企てた。それは、過去の正統主義への復帰かキリスト教的諸伝統の新たな総合かという二者択一を迫られるとするならば、「私は完全にシュライエルマッハーの側に決断する」、「もし、組織神学が意味をもちうるとすれば、われわれは、シュライエルマッハーとヘーゲル両者の挫折後に、再び総合を試みなければならない」という大胆な発言となって表明される。この観点からティリッヒ神学の特徴を指摘するならば、ティリッヒにおいては、まず諸学問を統合する学の全体的体系が構築され、その上で神学が体系化されるという二重の体系論が思索の前提として設定され、そしてこの体系の要に神学と哲学の相関関係が置かれている。もちろん、体系といってもドイツ観念論におけるような知の完結した体系ではなく、実存主義の体系批判を経たいわば開放的で非完結的な知の相互連関ではあるが。こうした神学理解は、シュライエルマッハーからトレルチを経てティリッヒに至り、さらにはパネンベルクに流れ込む神学思想の伝統を形成していると言えよう。ティリッヒが歩いたのは一九世紀の学問的神学の王道に他ならない。

ティリッヒの思想形成の思想史的コンテクストを具体的に見てみよう。とくに注目すべきは、ドイツの古典哲学とルター派の神学であるが、さらに限定すれば、前者では本質主義（前期シェリング、ヘーゲル）と実存主義（後期シェリング、キルケゴール）の哲学思想が、そして後者ではケーラーが問題になる。ケーラーはハレ大学でのティリッヒの直接の恩師であり、その影響は絶大であるが ── 聖書学、キリスト論、信仰義認論に関して ──、ここではドイツ古典哲学の影響を人間理解という点から論じてみたい。

近代市民社会は二つの顔を持っている。近代社会は人間にそれまでのどの時代にも増し

て多くの自由を与え、とくに西欧世界では啓蒙思想に端的に見られるように、迷信や封建的諸勢力からの脱却・解放が人類社会を無限に進歩させると夢想された。民主主義と科学技術は理想世界を実現するはずであった。しかし、近代社会はすべての人類を幸福にするものではなく、それどころか大衆社会における精神性の喪失や官僚的な管理社会への個の埋没など、多くの歪みを伴うものであった。一九世紀のキリスト教はまさにこうした時代の中にあったのであり、ここに次の二つのタイプの人間学が成立することになる。まず、人間や社会をその合理的構造において分析する人間学が存在する（本質主義）。その哲学における代表がヘーゲルである。しかし、眼を転じるならば、人間と社会をその合理性の歪曲から理解する人間学が本質主義の批判勢力として存在していることがわかる（実存主義）。ティリッヒはこうした二つの人間学をあれかこれかで捉えるのではなく、むしろ、人間の現実を、合理的構造と非合理的疎外（合理的構造の歪曲）の二重性（両義性）において捉えようとする。人間は神の被造物である限り、神の創造の善性に与っており、その本来の使命を果たしうる可能性と力を有している。しかし、この可能性は罪に規定された人間の歴史の現実においては致命的な仕方で歪曲されており、人間は実存的疎外の内にある。これらの両面は、人間をその現実において理解するための前提なのであって、ティリッヒは一九世紀の思想的遺産を継承しつつ、本質主義と実存主義のいわば統合を模索したと言えよう。こうした人間理解は人間の救済を理解する上で決定的な意味を持つ。なぜなら、人間における合理的構造（本質）とその歪曲（実存）のいずれが欠けても宗教的救済は無意味になるからである。一方で、人間は非合理性的な自己疎外の中に陥っており救済を必要とする。しかし、他方人間はその創造された本質をわずかでも保持しているからこそ救済されうるのであり、もし完全にその本質を失ってしまったならば、人間はもはや人間であることすらできない。ティリッヒは、人間存在の本質と実存の両義性という現実に立って、いかにして人間は救われるのかという問いを追求するのであり、その神学的解答は、「新しい存在」を核心とするキリスト論に集約されると考えて良いであろう。

以上のティリッヒの思想については、抽象的な単なる机上の理論と感じる人がいるかもしれない。しかし、ティリッヒは常に人間の救済の問いを具体的な現実（政治や経済、健康や病いなどの問題）に即して論じているのであって、高度に抽象的とも見える理論はいわば具体的各論を突き詰めて論じるための基礎であるという点に留意したい。

二　現在 ── 二十世紀の神学者ティリッヒ ──

次にティリッヒが生きた現在(1886-1965)に目を移そう。ティリッヒが生きた二十世紀は、二つの世界大戦、核戦争の危機、環境破壊、そして深刻な民族対立などによって象徴されるように、一九世紀的な近代社会の矛盾が一挙にしかも世界的規模で顕在化した時代である。生の無意味化や自己疎外は多様な形態に分化しつつもわれわれの生を隅から隅まで覆い尽くしている。しかし同時に、科学技術の進歩が驚くべき幸福と繁栄をもたらしたことも否定できない。医療の進歩一つをとってもそうである。こうした状況下で、宗教と文化、教会と社会の分裂状況はますます深刻化し、キリスト教は自己同一性の保持と状況への適応性との両面で危機に陥り、文化は精神的な深みを喪失してゆく。未来の人類は二十世紀を不安の世紀と呼ぶであろう。

こうした時代の中でキリスト教思想を構築しようとするならば、それは一九世紀の思想

的蓄積を継承しつつも、それらの限界を超克することが必要になる。第一次世界大戦後にドイツの若い神学者たちが自覚したのはこうした時代状況であり、その中にバルトがおり、またティリッヒがいたのである。こうした連関から見るとき、われわれはティリッヒの思想を特徴づけるものとして文化の神学と宗教社会主義論を挙げることができるであろう。

一九世紀を継承かつ超克する新しいキリスト教思想の構築 ── シュライエルマッハーとバルトとの間 ── に向けて、ティリッヒが提唱するのが「文化の神学」である。それは宗教と文化、キリスト教と近代的世俗主義の分裂を克服し、自律的文化の深みに宗教性を再発見しようとする試みである。具体例として芸術の問題を取り上げよう。「宗教は文化の内実であり、文化は宗教の形式である」という文化の神学の基本命題を芸術に適用するならば、宗教的芸術と世俗的芸術といった通俗的な二分法は単純には成立し得ないことになる。むしろ、問われるべきことは、世俗的な形式のもとでいかなる宗教的内実が表現されているのか、そこに人間社会の宗教性がどのように反映しているのかである。ティリッヒはいわゆる宗教的題材を描く絵画が宗教的絵画であるのではなく、ゴッホの「星空の夜」やピカソの「ゲルニカ」のなかに自然の深層に迫る創造性や現代の疎外と絶望を直視する眼差しを発見し、そこに深い宗教性を認める。文化の営みの内に真剣な宗教的問いかけを読みとり、それに呼応するメッセージを語るときにのみ、キリスト教は現代人にとってその意味を回復できるのである。

しかし、このメッセージの回復は、哲学的理論や芸術活動を越えて、何よりも社会的実践的レベルにおいて追求されねばならない。ドイツ時代の宗教社会主義運動から始まる政治状況への積極的関わりにおいて、ティリッヒは教会と社会の関係性の再構築をめざした。キリスト教の隣人愛はいかなる社会的現実性を有するのか、民族とキリスト教はいかに関わるのか、労働者階級の悲惨な疎外状況に対してキリスト教はいかに行動するのか。「プロレタリアートの状況とはそれについては考慮してもしかるべきだというような任意の現実ではない」のであって、キリスト教は「大衆の内にあり表現されようとしている新しい理念」に対して耳を傾けねばならないのである。大衆は歴史的運命の担い手なのである。こうした問題に取り組む中で、カイロス、神律、デモーニッシュなものといったティリッヒの歴史神学の骨格が形成されていった。それは、ヒットラーあるいはドイツ的キリスト者との闘争においてその真価が問われることになる。ティリッヒの宗教社会主義論は、現代の解放の神学のコンテキストにおいて再評価すべき多くの洞察を含んでいる。

以上のティリッヒの思想は現代の弁証神学と解することができるであろう。ティリッヒの努力は二千年間のキリスト教の伝統と遺産を二十世紀の現代における生きた宗教的メッセージとして回復することに向けられていた。それは弁証神学という名称が持つ防衛的イメージを越えて、現代の文化と社会に対する鋭い批判性に裏打ちされている。われわれは宗教と文化の二分法を越えようとするティリッヒの真摯な努力から多くの貴重な教訓を学ぶことができるであろう。

三　未来 ── ティリッヒ神学の未完の可能性 ──

二一世紀に向かう日本でキリスト教思想に関心を持つ者として、われわれはティリッヒよりいかなるメッセージを読みとることができるであろうか。晩年のティリッヒの思想を見るとき、そこには二一世紀神学の中心テーマとなると思われる諸問題への先駆的取り組

みを確認することができる。このような取り組みは単なる思いつきでなされているのではなく、近現代のキリスト教と人類社会についての深い思索に裏打ちされた注目すべき洞察に満ちている。とくに科学技術と多元性の問題を紹介することにしよう。

まず、科学技術について。ティリッヒの科学技術についての洞察は、その両義性（光と影）に向けられている。科学技術は人類に驚くべき未来の可能性を切り開いた。「宇宙飛行士や原子物理学者らはシンボルとなり、人間実存の新たな理想像の形成に決定的な役割を果たした」（『宗教の未来』）。科学技術はその理論の見事さだけでなく、その明るい未来像・理想像によって多くの現代人の感性を魅了している。しかし、ティリッヒの晩年期（一九六〇年代）になると、科学技術の影の面が目立つようになる。「この影は兵器の開発と宇宙探検が互いに結び合わされている限りなくならないであろう」。当時の東西冷戦下での核兵器の存在、さらには環境破壊など、大きな闇が人類の未来を覆い尽くすかに見えた。こうした科学技術の両義性を前にしてティリッヒが提起するのは、「科学と神学の新たな協力・再統合」の試みである。例えば、医療における身体的治療や精神療法に対して、宗教的癒しはいかなる役割を果たしうるのであろうか。この問いは、医療の高度化・専門化が人間の全体的な癒し ── ホスピスケアの事例を引き合いに出すまでもなく、病いの苦しみは身体の痛みに還元できない ── への眼差しを希薄にする中で、ますます先鋭化せざるを得ない。「人間イエスを象徴的に救い主（治療者）としていいあらわすことができたという事実は、宗教的癒しと医学上の治療とが根本においては一つであることを示す」、「宗教的癒しは精神的治療の深みの次元である」。今求められているのは、専門化した部分的な諸治療方法を人間存在のための全体的な癒しの観点から再統合することなのである。晩年のティリッヒが提出した「生の次元論」は科学と神学の新たな協力に対して多くの示唆を与えてくれるであろう。

次に、多元性であるが、二一世紀の人類社会は一元的単一化ではなく多元的調和をめざすことになると思われる。欧米、白人、中産階級、男性といった所に定位した神学はもはや未来の人類に対する指針とは成り得ないであろう。現在進行中の宗教の神学、フェミニスト神学などはすべて人類の多元性（諸宗教、諸民族、男女など）にふさわしいキリスト教思想の形成と密接に関わっている。ティリッヒは東洋の宗教との出会い（日本の宗教者との対話など）をきっかけとして六十年代には「宗教史の神学」を提唱し ── エリアーデはこれを「実存的な危機や現代の西洋社会の宗教的真空状態だけでなく、アジアや未開社会の宗教的伝統、そしてそれらに最近起こっている危機や危険な変形をも考慮に入れた組織神学」と説明している ── 、また『組織神学　第三巻』(1963)ではジェンダーの問題を神学体系内に導入している ── 「問われうるただひとつのことは、本来的にプロテスタント的な象徴の中に、男性か女性かの二者択一を越えて、一面的に男性的に決定された象徴に対抗して展開され得るような要素があるかどうかということなのである」 ── 。こうした様々な思索を通して、晩年のティリッヒは多元性への取り組みを本格的に開始しつつあったのである。残念ながら、こうした未来へ向けた思索はティリッヒの死によって中断されることになったが、それは次の世代の神学者たちに確実に受け継がれている。ティリッヒは「ティリッヒ学派」こそ作らなかったが、その思想的インパクトはキリスト教世界を越えて仏教や神道にまで及んでいる。ティリッヒのメッセージから何を継承するかは、われわれ自身の手にゆだねられているのである。

結び ── 永遠的なものへのまなざし ──

ティリッヒは彼の時代を駆け抜け思索を行った。彼の軌跡は何を目指して描かれたのか。彼は前方を見るだけでなく、上なるもの、永遠なるものを見上げつつキリスト者としての歩みを行ったのである。現代という不安の時代にあって、その現実の深淵を凝視しつつも、なおも希望を失わなかったのは、生きる意味の源泉である永遠なるものへのまなざしを失わなかったからに他ならない。一切の有限なもの形あるものが無意味性の深淵に飲み込まれるときにも意味ある生を可能にし、人間に自己を肯定する勇気を与えるもの、それがティリッヒの神（有神論の神を越えた神）とこの神に対する絶対的信仰（「意味への信仰」）だったのである。しかし、この永遠への問いは他者との関わりにおいて具体化されねばならない。宗教的思索は神と信仰者個人との実存的関わりを核心とするものではあっても、それは単なるアトム化した個人の営みではなく、他者との対話の場に開かれることによって始めて豊かな公共性を獲得できるのである。シカゴ時代のティリッヒの同僚であり友人でもあったブラウアーが証言するように、ティリッヒは対話の達人であり、学生との対話はティリッヒの思索を豊かなものにしたのである。しかし、キリスト教は二一世紀に向かう現代人にとって永遠的なものとの関わりと他者との関わりとが切り結ぶ生きた場であり続けることができるのであろうか。こうして、ティリッヒへの問いかけはわれわれ自身の生の決断の問いへと投げ返されることになる。ティリッヒを離れ自らを省みるとき、二一世紀のキリスト教は神と隣人との前でいかなる在り方を選び取ろうというのであろうか。